

博物館における近現代展示

ナショナル・ミュージアムの使命

新井 勝 紘

避けて通ってきた近現代史

日本の博物館では、なぜ近現代史の展示がないがしろにされているのだろうか。国公立の博物館で、近代史、現代史をともに取り上げているところはほとんどないといってもいいだろう。また、近代文学館や近代美術館、あるいは工芸館、フィルムセンターといった近代を専門とする館はあるけれど、近代歴史館、現代歴史館は聞いたことがない。文書館、公文書館、資料館といった施設が、代替事業を行なっているところもあるが、本格的な展示とはいえない。

もちろん例外がない訳ではない。北海道開拓記念館や横浜開港資料館のように、研究に裏付けされた見応えのある展示を行なっているところもある。館の姿勢と学芸員の地道な研究と努力に負うところ大であるが、いわゆる都道府県立や市町村立の博物館に一般化しているとは思えない。「まとも」とか「本格的に」という条件をつけなくても、展示そのものがないという例もあるし、またあったとしても、いかにもつけ足し、おぎなりといった感が強い。全国の博物館を行脚した訳ではないので、トータルな感想ということにはならないが、そう的はずれな指摘ではないと思う。

私のある国立歴史民俗博物館も例外ではない。一九八三年三月に開館して以来、一〇年にもなろうというのに、近代と現代の歴史展示が欠落してしまったままの状態が続いている。「わが国最初の国立の歴史博物館」という謳い文句であちこちにアピールしているにもかかわらず、その歴史展示は近世末で途切れ、近現代史がすっぱり抜け落ちている。

聞くところによれば、近現代の展示は開館当初には計画されてい

たという。それがなぜ構想だけに終り、次々と後廻しにされてきたのだろうか。詳細は不明だが、館の側に積極的に推し進める姿勢がなかったことは事実だろう。ともかく二の次でいいということだったのではないだろうか。近現代担当スタッフが、長い間配置されなかったという現実一つとってみても、歴博の姿勢がみえている。もちろん編年でいけば、最後にはなるのだが、かといって展示しなくてもいいという免罪符にはならない。

歴史系唯一のナショナル・ミュージアムの看板を背負っている館にしては、画竜点睛を欠くといってもいいだろう。日本の歴史をどこまで扱い、どんな視点でみせるかは、当然開館前の展示構想で煮詰められていたはずなのだが、近現代展示の実現は先におくられた。一般的には「近現代展示はやりづらい」といわれる。この背景には、最初から構えてしまった態度を読みとることができるが、「なぜ」、「なにが」、「どうして」やりづらいのだろうか。この辺のところを解き明かしていかないと、無理してやらなくてもいいという素通り消極論を喝破することができないだろう。おそらく、どの館もこれらの問いに真剣に取り組まないまま、とりあえず避けて通ってきたということなのではないだろうか。

近現代史を専攻した学芸員や研究スタッフが博物館に少ないというひとつの理由だろう。内部に強力に推進する人がいなければ、無理してまでもという論に押し切られてしまうのは当然である。近現代史の研究者が、いわゆる「モノ」に対して執着心をあまり持たないということも、遠因としては考えられる。古文書や文献資料に依拠して研究を進める場合が多いこともあって、「展示物」という発想が生れにくい。そのことが「展示がむずかしい」ということに

もつながってくる。「なにを」「どう」展示したらいいかのかわからないということにもなる。古文書や文献ばかり並べても意味がないという短絡的な結論を導びきやすい。

地域発展史へのすりかえ

しかし、こうした物理的かつ研究の方法論的な理由が、近現代展示を困難にしている最大の理由ではない。いや困難に感じているといった方が正確だろう。「やりづらいい」という判断があるからこそ、この博物館も尻込みしているわけである。展示の具体化に踏み出す前から、予測的結論を出してしまっているのだろう。

つまり、時代が近くなればなるほど、歴史の評価は流動的で、一般的に認知された史観が得られにくいという見え透いた口実にふりまわされているのである。それに体験者がまだ多く生存中だからということも、いまひとつ乗り出せない理由付けとなっている。

それに日本の近現代史の場合は、戦争・天皇・憲法・侵略などの問題を避けて通るわけにはいかないという現実がある。この歴史をネグってしまったら、脊髄をぬいた空洞の歴史になってしまう。しかし、だからといって正面から取り上げる勇気もないという訳である。なんとかこの問題に直接触れないで展示する方法がないかと一応は苦悩するが、そんなに好都合な案がでてくるわけではない。

そこで、地域発展史に沿った、地域密着型の展示でごまかす策がでてくるという次第だ。この地域はこのようにして発展してきた結果、今日があるという視点が基調になり、戦争は加害の場面を恣意的に避け、ひたすら被害の惨状を表現してお茶を濁すことに落ちつく。これなら誰からも文句は出ないとにらんでのことだ。たしかに戦争・天皇・憲法という問題は、どれも不可分の関係にあるわけだから、どれかを「まともに」取りあげれば、もう後にはひけなくなる。だからおじけづくのである。

戦争と天皇制を見据えた展示の苦悩

それでは、ナショナル・ミュージアムとしてはどうなのであろうか。地域密着型で逃れるわけにはいかないのは当然である。しかし、避けたいという視点からは、結果として日本の発展の基礎にあるといわれている「近代化」路線を基軸にする以外に出てこない。さまざまな犠牲や「不幸な出来事」はあつたけれど、発展してきたことは事実なのだから、これこそ誰も文句はいわせない。世界に冠たる発展を遂げた日本の近現代史を、このように跡付けて何が悪いという理屈につながる。

「わが国最初の国立の歴史博物館」で唯一といわれている館に、近現代担当として展示を受けもたなければならぬ立場にいる私としては、こうした現状から目をそむける訳にはいかない。幸いなことに、歴博では館外の研究者からなる展示プロジェクト委員会が設置され、そこでの徹底討議を経て展示構想が決定される仕組みになっている。もちろん担当の館員もその一員として名をつらねる訳だから、担当者としての意見も十分に汲みとってもらえる訳である。

一方で、近現代展示をできるだけ速やかに実現しなければならぬという使命を持ちながら、「まともに」、「本格的に」取り組む方策を見つけたさなければならぬ立場にあると、自分自身を位置づけているのだが、この壁を乗り越えるには、相当のエネルギーと経験と知力と意欲が必要となっている。展示プロジェクト委員会の意をうけて、具体的な展示案を模索するということなのだが、いわゆる近代化至上主義におぼれないで、帝国主義、軍国主義、侵略、戦争、加害者、さらにこれらを貫く「近代天皇制」をも見据えた上での展示を追求する命題を自分に課しながら、国立博物館としてのアイデンティティを強く出さなければならぬ立場にもある。それに開館以来、一〇年間も放置してきたという責任も館としてはある。それに海外からの見学者も多いという条件もある。

“アジアの中の日本”、とりわけ近現代史はこの視点を抜きにし

ては語れない訳だから、これも「まともに」ということになる、相当のエネルギーを費やさざるを得ない。さらに近代史の中の被差別部落、アイヌ民族、在日朝鮮人の問題等にも日本人の差別意識や近代日本社会の差別構造にも正面から向きあおうとするものだから、壁は厚くて高い。

ともかく、「できるだけ避けたい」とか「日本の近代化バラ色論」では、もう済まない国際情勢であることを認識した上で、大胆な意識改革を行ないながら、「なにを」「どう」展示するかを追求していく姿勢を打ち出していくことがせまられている。

いま私は、一九九三年三月一八日の近現代展示の一部開室に向けて、こうした多重苦のまっただなかにいる。

